

2022 年 2 月 22 日

2021 年度聖路加国際大学大学院看護学研究科
課題研究

先天性疾患により永久的人工肛門を必要とする子どもの発達課題に関する文献検討

Developmental Challenges in Children Requiring a Permanent Stoma Due to Congenital
Diseases : Literature Review

20MN003

天野 秀基

要旨

【目的】先天性疾患により永久的人工肛門を必要とする子どもとその親についての先行研究から、発達過程を人工肛門のある体で過ごす子どもとその親の各発達段階における課題を明らかにすることを目的とした文献レビューである。

【方法】医学中央雑誌 Web 版 (Ver.5) を用いて、永久的人工肛門を必要とする先天性疾患として検討した疾患や病態に類似する語と人工肛門に関連した語をキーワードとして検索を行った。対象文献から子どもと親の生活上の特徴として抽出した内容を発達段階ごとに整理し、統合した。発達段階は、本邦の学校制度と段階的切れ目を同様にする区分を参考に「未就学期」「学童期」「青年期」として設定した。

【結果】データベースより 1,550 件が抽出され、その中から適格基準に該当した 14 件にハンドサーチで得られた文献を加え、15 件を分析対象文献とした。未就学期では、親は子どもの能力をアセスメントしながら社会的環境への適応を目的に子どもへセルフケアの移行を開始し、子どもは人工肛門のセルフケアのうち排泄物処理を行えるようになっていた。子どもが排泄物処理の操作を獲得するためには、段階的で継続的な訓練が必要であった。子どもが獲得できなかったセルフケアについては、学校環境で継続的に補完されるように就学の過程で調整が必要であった。学童期では、子どもは病状開示についてのジレンマによる葛藤を抱えており、子どもなりの対処行動を行っていた。子どもは学校環境で発達中のセルフケアを補完されるためにさまざまな支援と配慮を受けていたが、特別な人員配置や排泄空間の調整という違いから、周囲の子どもの興味を引くことにつながっていた。また、子どもの病気や自身の体に対する認知は、セルフケアの操作の機会を得ていない子どもでは誤ったものになっており、一方で、操作を行っていた子どもでは子どもなりの認知を発達させていた。青年期では、子どもは相談相手の不在から孤立していた。また、セルフケア能力の発達に支援を要する子どもとその親は、相互依存的な親子関係になっていた。人工肛門ケアの適正化と母子分離、母子それぞれに対する心理的支援によって、子どもはセルフケア能力を発達させ、子どもにおいては自己効力感に、親においては子どもの力を認めることにつながっていた。

【結論】先天性疾患により永久的人工肛門を必要とする子どもは、就学や仲間集団への参加という発達の課題に直面するなかでセルフケア能力を発達させ、青年期では社会的自立の準備につながっていた。自立を目的とした見通しのなかで、社会的環境への適応のために子どもの発達を促すことが、それぞれの発達段階における子どもと親の課題である。